

「福音を証しする者」
使徒言行録 20 章 17-27 節

パウロは、エルサレムへと向かう旅の途中、エフェソの教会の人々に最後の言葉を伝えます。パウロはまず「アジア州に来た最初の日以来、わたしがあなたがたと共にどのように過ごしてきたかは、よくご存知です」(18)と、自分がしてきたことについて語り始めます。パウロがこれまでしてきたこととは、「主に仕える」ことです。この「仕える」という言葉は、「奴隷が主人に奉公する」という意味の「仕える」です。パウロはそのようにして「主に仕えた」のです。

19 節にはより具体的に「すなわち、自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主に仕えてきました」とあります。「自分を全く取るに足りない者と思い」というところは、口語訳聖書などでは「謙遜の限りを尽くし」と訳されています。

キリストの十字架と復活を宣べ伝えるために各地を巡り歩き、たとえ人々から迫害され、試練に遭い、命さえも危ぶまれるような生活であっても、自分の思いではなく、主イエスの思いに聞き従う。それが「仕える」ということです。イエス・キリストに従って生きるということです。

しかし、パウロも、初めからそのような人であったわけではありません。復活のイエス・キリストと出会う前は、謙遜とはほど遠い、全く真逆の生き方をしている人でした。パウロは、自分が正しいと思うことこそ神様に仕えることだと確信して、キリスト者を迫害していたのです。しかしパウロは、主イエス・キリストと出会ったことによって変えられました。こんなにも傲慢な思いで生きてきた自分のために、ましてや神様に仕える人々を迫害していたこの私のために、主イエス・キリストが十字架にかかって罪を赦してくださった。その恵みに触れた時に、パウロは、自分が全く取るに足りない無価値な者であることを素直に認めることができたのです。そして、自分の思いや考えに固執するのではなく、本当の謙遜な者になることができたのです。

パウロは、自分が受けたイエス・キリストのこの大いなる恵みを人々に伝えるためなら、「役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました」(20)と語ります。パウロが語った「役に立つこと」というのは、「神に対する悔い改め」と「わたしたちの主イエスに対する信仰」です。私たちは、神さまが赦してくださるからこそ、悔い改めることができます。神さまのもとに帰って行くことができるのです。パウロは、このことを言葉だけでなく、自分の生き方をもって、一つ残らず、伝え、教え、証してきたのです。

さらにパウロは、「そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます」(22)と語っています。「“霊”に促されて」とありますが、これは正確に訳すなら、「わたしは“霊”に縛られて」となります。つまり、このことは、パウロ本人の意思によるというよりも、もう縛られてしまったので行かざるを得ないという言葉です。そのように聖霊に縛られて連れて行かれるその先に何が待ち受けているのか。それは投獄と苦難です。パウロは、エルサレムに向かうことが大変危険なことであることを知っていました。逮捕や命の危険すらあることは分かっていたのです。

しかし、それらはすべて、聖霊によって導かれた中での出来事だということです。それゆえ、パウロは信じるのです。神さまご自身がパウロを用いて、必ずご自身が望まれることを成し遂げてくださる、そう確信するのです。

そして、その確信があるからこそ、パウロは心から言うことができるのです。「自分の決められた

道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません」(24)と。

「神の恵みの福音」を証しすることをパウロは、たとえ命を失うことになってもしなければならぬ任務であると考えています。なぜなら、福音は、人の存在そのものに関わることだからです。滅びるか永遠の命に与るかかどうかという問題だからです。

だからこそ、パウロは、各地を巡回して御国を宣べ伝えたのです。ときに涙を流しながら、滅びに向かっている人々が大勢いる現実に関心を痛めつつも、何とか一人でも救われてほしい、そういう願いを持って心から主に仕え、キリストの十字架と復活を宣べ伝えてきたのです。

しかし、このことは、パウロにだけ与えられた任務ではありません。クリスチャンとされた私たち一人ひとりにも与えられているものです。私たちにも、神の恵みの福音を伝えるという使命、任務が与えられているのです。私たちには、福音を証しする責任があります。もし、これを伝えずにいるなら、その福音を聞かなかった人は、神さまを知らず、神に逆らい続ける歩みをしなければなりません。ですから、その人たちに対して私たちは「血の責任」があります。クリスチャンは、自分が天国に行ければそれで良いというわけではありません。この責任を果たしていかなければならないのです。

ただし、私たちが問われるべき責任は、神の恵みの福音を語るということに対してです。たとえ、それを聞いた人がその時に信じなかったとしても、それは語った者の責任ではありません。信仰の告白は聖霊の働きであり、神の領域です。しかし、聖霊の導きがあつたにもかかわらず、なお主を拒むのであれば、それはその人の責任です。私たちにできるのは、証しすることだけです。しかし、聞くことがなければ信じることは出来ません。ですから、私たちの周りにキリストの福音を聞いたことがなかったという人がないように、神の福音を証しする者でありたいと思うのです。